

再臨のキリストによる
第3福音書

ヘルメスの杖・下
—大錬金術—

THE GOSPEL
BY CHRIST OF

THE SECOND COMING *No. 3*

CADUCEUS second volume

II

SEIDOU
SEIDON

正道

目次

ヘルメスの杖・下	
第3福音書	3
座標9 アルベド	4
全体の目次	7
第4章 時空的に捉えるアルベド（放射的直線）	
（1）アルベドの全体像	11
（2）汎神論的な神	17
（3）時間論者アウグスティヌス	21
（4）存在の原理	24
第5章 倫理的にみるアルベド（救済）	
（1）根源苦からの解放	29
（2）絶対的な許し	32
第6章 マリア、イエス、パウロ	
（1）童貞聖母	39
（2）救世主イエス	42
（3）アルベディアン・パウロ	47

ヘルメスの杖・下

第3福音書

再臨のキリストによる
第3福音書

ヘルメスの杖・下

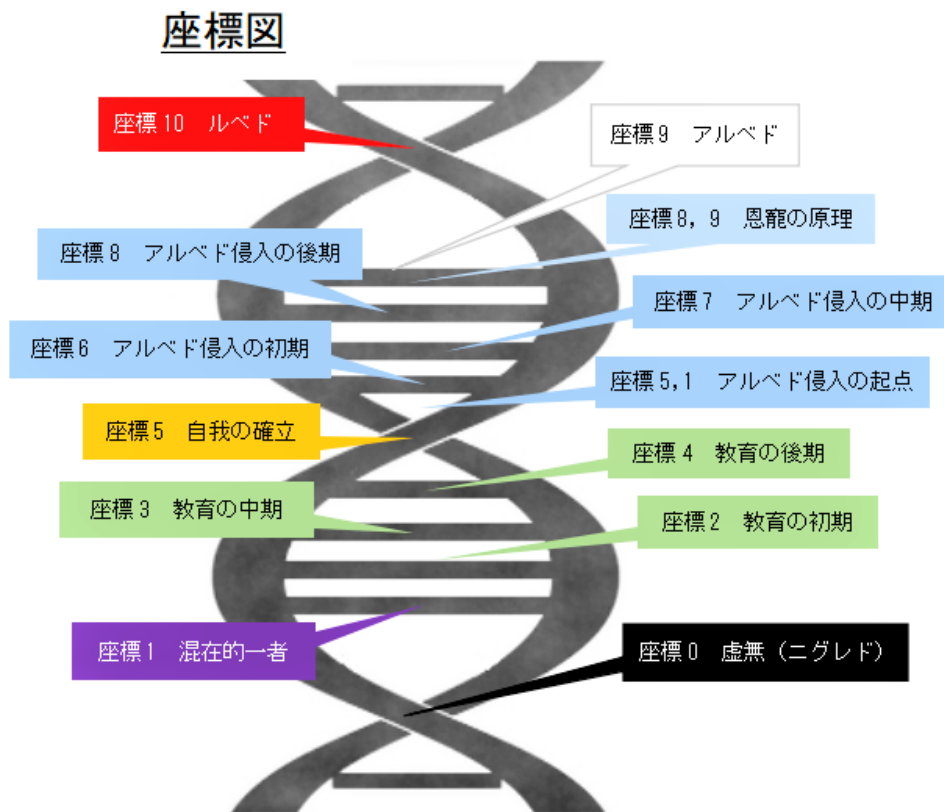
——大錬金術

神とは、絶対に無限なる実有、言いかえればおのおのが永遠・無限の本質を表現する無限に多くの属性から成っている実体、と解する。

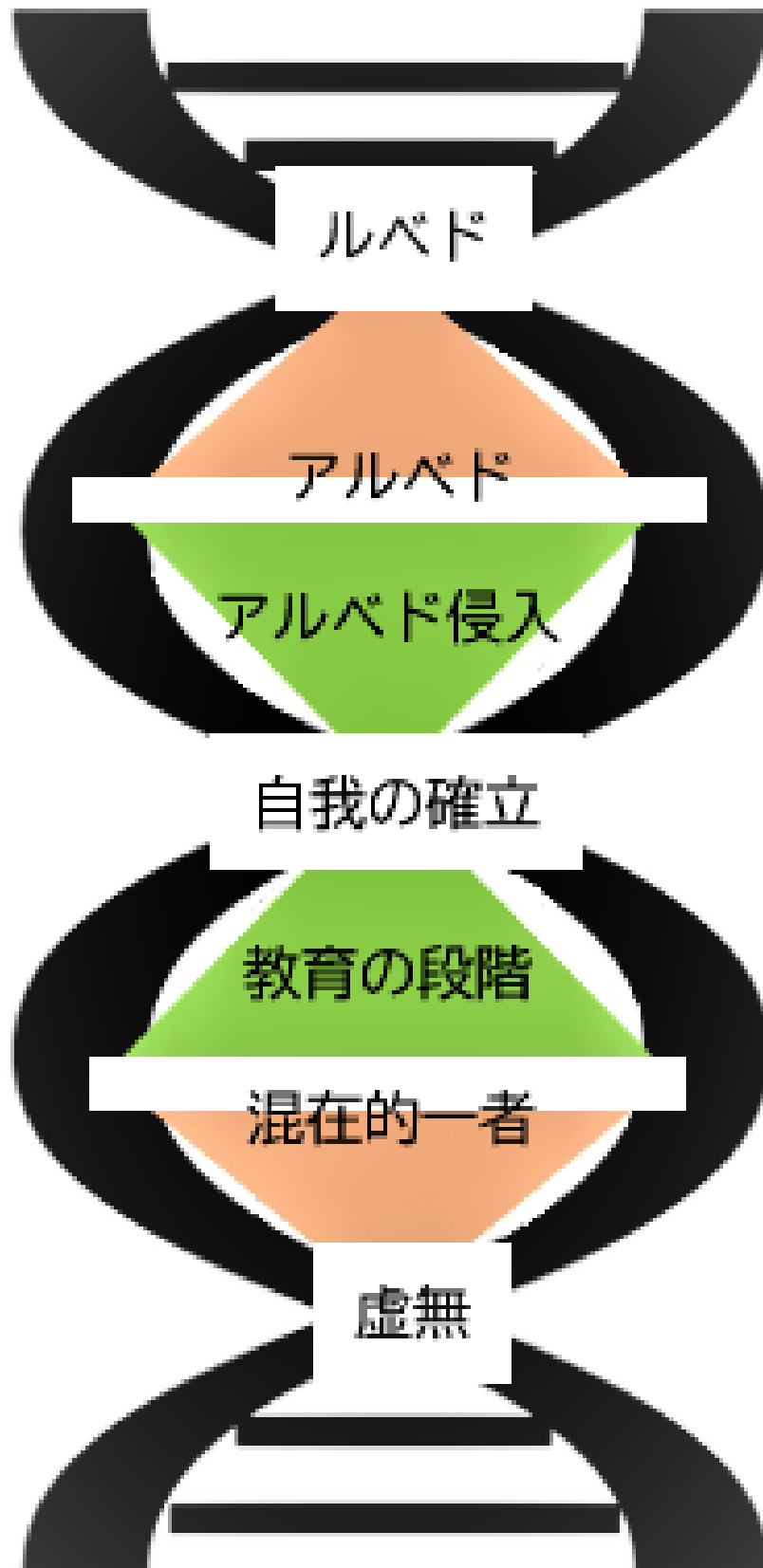
すべて在るものは神のうちに在る、そして神なしには何物もありえずまた考えられない。

スピノザ『エチカ』 畠中尚志訳

座標9 アルベド

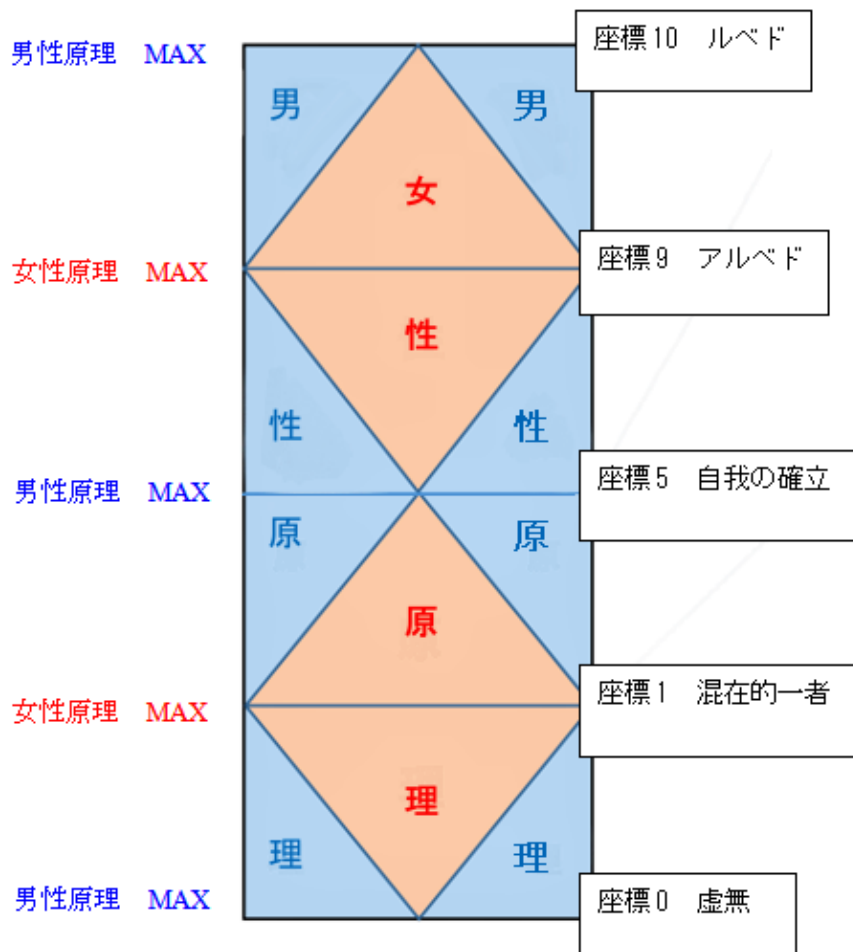


2022-05-26 \ (4 \).png



2022-11-30 \ (1 \).png

原理図



2022-05-26 \ (7 \).png

全体の目次

序 弁証法としての錬金術

座標9 アルベド

- 第1章 空間的にみるアルベド
- 第2章 時間的にみるアルベド
- 第3章 永遠の諸相
- 第4章 時空的に捉えるアルベド
- 第5章 倫理的にみるアルベド
- 第6章 マリア、イエス、パウロ

座標9～0 帰還と下降

- 第1章 アルベドについての追加考察
- 第2章 アルベドからの帰還と下降

座標0 ニグレド

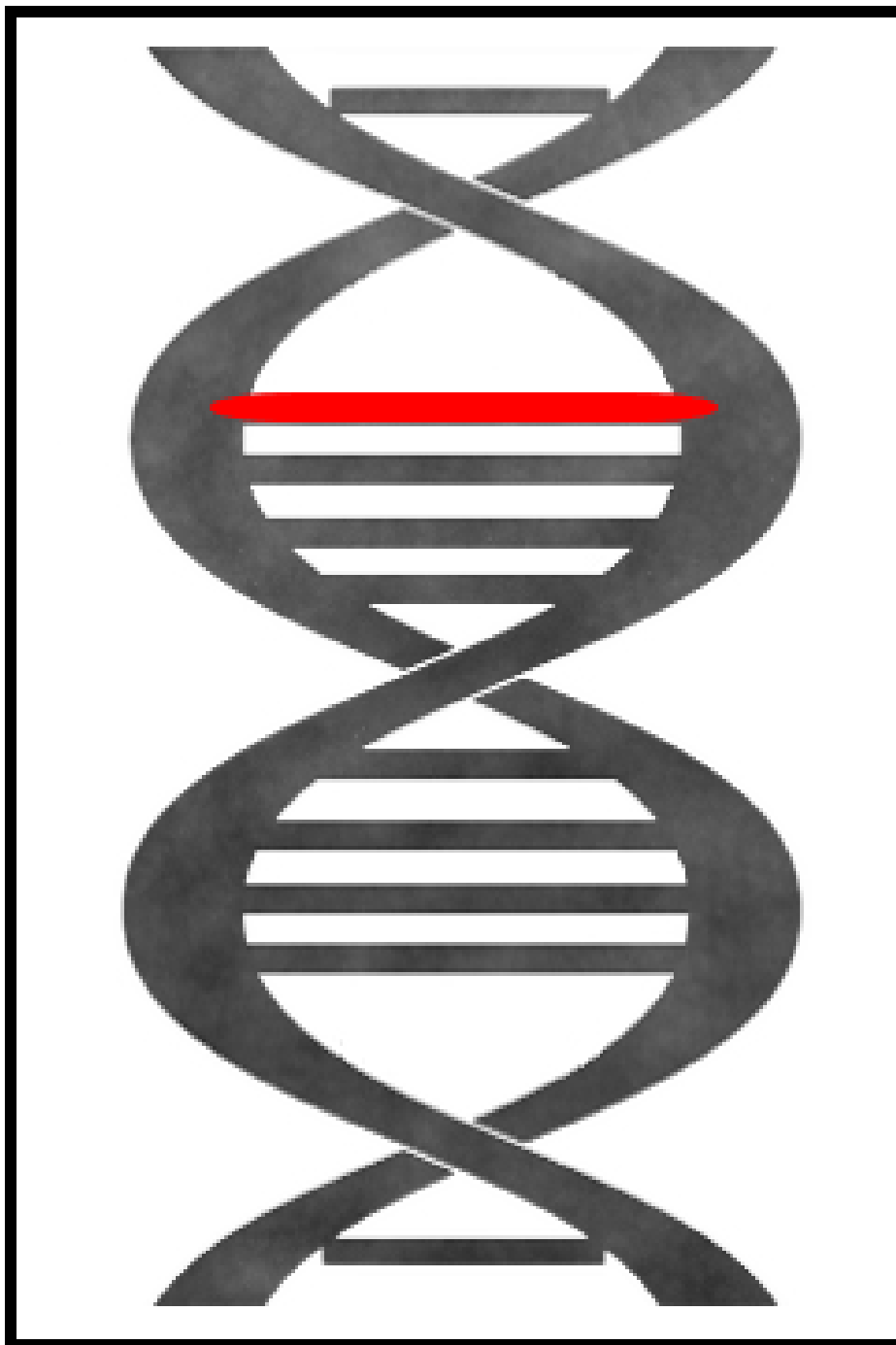
- 第1章 虚無というアンチテーゼ
- 第2章 ディオニュソスの宗教
- 第3章 虚無による一致

座標10 ルベド

- 第1章 クレアティオ・エクス・ニヒロ
- 第2章 ジェネシス（創世記）
- 第3章 暁の太陽の真理
- 第4章 アルベドとルベド
- 第5章 神に干渉する人間像
- 第6章 人間＝神、神＝人間
- 第7章 神と黄金

第4章 時空的に捉えるアルベド（放射的直線）

(1) アルベドの全体像



2022-12-06 \ (4 \).png

時空を分割した第1～3章

第1章において、空間的に見たアルベドが無限であることを。第2, 3章において、時間的に見たアルベドが永遠であることを語ってきた。

無限と永遠——しかし、これら二つの相は、主体が「別々の事がら」として体験するものではない。じっさいに主体が体験するのは、唯一の“時空的な”アルベドであるところの「放射的直線」なのである。

ほんらい空間と時間は、決して切り離せるものではない。それらは結局、一つの「時空」としてしか、体験できないものなのである。

したがって、無限と永遠は、その時空的な「放射的直線」を、無理やり二つの位相に分けて形容したものに過ぎない。

つまり、放射的直線の、その空間的相貌だけを眺めれば「無限」になるし、放射的直線の、その時間的相貌だけを眺めれば「永遠」になるということである。

そうであれば、アルベドの体験とは、第一の定義としては「放射的直線との合一」に他ならない。では、いったい「放射的直線」とは何だろう。

最もシンプルに答えるならば、それは「太さが無限、長さが永遠である直線」である。

「現在」を再検証する

まずは、放射的直線の“長さ”から見てみよう。

その線分の中央にあるのは「現在」である。この現在から、一方において、過去が放射され、もう一方において、未来が放射されている。それゆえ私は、この直線を“放射的”と形容しているのである。

そして、何よりも忘れてならないのが、線分の中央にある「現在」である。この現在は、時間的には「虚無」であった。

これに関しては、第2章で詳述したとおりだ。残像と予期を消し込んだ現在は、まさしく虚無なのである。

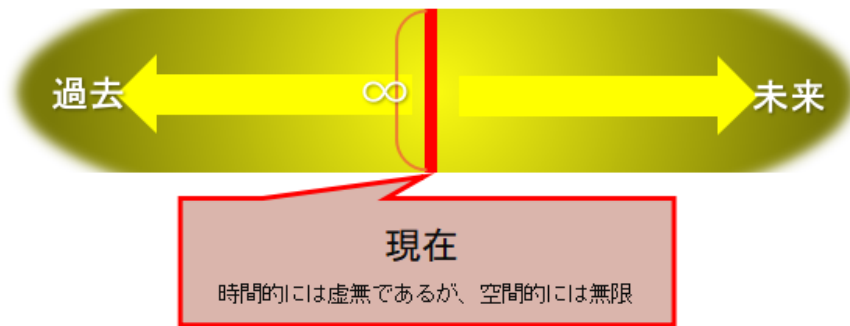
では、この「現在」を、空間的に眺めるとどうなるだろう。時間的に虚無だから、空間的にも虚無だろうか。それとも別のものが見えてくるのだろうか。この点を再検証してみたい。

そうしてみると、この再検証の課題を、次のように言い換えることが出来るだろう。「アルベド体験者が、まさしくその体験中に“いま現在の空間”を眺めたとする。そうすると、彼の目には、いったい何が映るのだろうか」

このように言い換えると、割合あっさり答えが浮かんでくる。すなわち、その答えは「無限」あるいは「無限にして一なるもの」とならざるを得ないのである。

それはそうだろう。主体が眺めるのが、基本的に“いま現在ある空間”であることは当たり前なのだから。そのうえで、アルベドの空間的相貌が「無限」であることは、すでに第1章で語り尽くしている。

したがって、放射的直線とは、この「無限」なる現在から、過去と未来が放射されている直線なのである。

放射的直線 (太さが無限で、長さが永遠である直線)

2022-05-28 \ (1 \).png

一元性によって形成される直線

ところで、直線とは、一次元の形態である。そして次元とは、構成要素が一つしかないということである。

ではまた検証してみよう。放射的直線は、一体いくつの構成要素で出来ているのか。

まず現在は、空間的には「無限」である。そしてそれは、無限であるがゆえに“一つのもの”である。

すべてを包含したそれは、次に数えるべき数を持たない。それゆえに、疑いようもなく一次元的なものである。つまり、ここには構成要素が“一つ”しかない。

そして、過去と未来とは「現在の自己展開」「現在の自己投影」であった。

言い換えれば、過去も未来も“現在”なのである。ということは、そこには現在しかないことになる。すなわち「現在ひとつ」である。

かくして、放射的直線は「無限である現在」という、たった一つの構成要素によって形作られている「次元存在」なのである。そしてまた、次元存在である「直線」なのである。

もっとも、ここまで抽象的な話をすると、かえって放射的直線が「形態的にイメージするのが難しいもの」となってしまうかもしれない。

実際「放射的直線とは、現在による次元の存在である」と言われたとき、そこに何らかの形態をイメージできる人は稀だろう。

そこで、さしあたり私は、放射的直線を「太さが無限、長さが永遠である直線」と表現しておこうと思う。

たしかに、その言葉自体には、放射的直線の実質を、表現しきれていない部分も多いだろう。

しかし第1～3章を精読した読者諸君ならば、この程度の“荒い”表現であっても、それほど「放射的直線」の本質的なところから、離れてしまうことはないだろう。

放射的直線の長さ

放射的直線は、そのように「太さが無限、長さが永遠である直線」である。ただし、その太さが、真に「無限である」と言えるのは、実は、線分のなかの“現在”の部分のみである。

それ以外の部分は、無限には満たない。つまり過去に向かって伸びてゆく線分や、未来に向かって伸びてゆく線分は、放射の起点（現在）から遠のくほど先細りしてゆくのだ。

そして「その線分の先端はどうなっているか」といえば、結局のところ、淡くなり、薄くなって行って、ついには闇の中へと溶けてゆくのである。

それは「放射」という性質上、起こるべくして起こることだと言うほかはない。

むろん、その薄くなってく漸次的過程を、数値的に表現することは出来ない。目盛りくつで、これぐらいの数値ぶん薄くなる、とは言えない。むしろ文学的に、「過去は忘却の彼方で、未来は予兆の彼方で、線分が、次第に闇に呑み込まれてゆく」

と表現したほうが、余程その実情に近づくことだろう。

しかも、その直線の末端がどこになるかについては、厳密に統一されていない。

たとえば、放射的直線に合一した主体が、忘却と無関心に抗い「さらに遠い過去、さらに遠い未来」に関心を示したとする。こうした場合は、放射的直線の線分は、通常よりもさらに伸びることになるだろう。

したがって、線分の先端（忘却限界点、予兆限界点）が、どこであるかを定めるならば、当のアルベド体験者の「関心の限界」と定義づけたほうが適切かもしれない。

放射的直線のまたの名

たとえば、神智学には「アカシックレコード」というものがある。これは目に見えない歴史書であり、人類史の霊的な記録であるらしい。

そして、おそらくではあるが、この「アカシックレコード」という名称は、かの放射的直線の線分の“またの名”なのである。

このアカシックレコードを読み取ると、歴史の教科書にも載っていない、超太古の歴史を紐解くことが出来るという。前出のエドガー・ケーシーも、このアカシックレコードを読み解いて、消えたアトランティス文明の有様などを書き残した。

ただし、このアカシックレコードは「それに接触した者の能力によって、読み取れる情報の量が変わる」という相対性を持っているのだ。その情報の確度においても、またその時間的範囲においても。

となれば、それは「アルベド体験者の資質によって、放射的直線の長さが変わる」ことを示唆していることになるだろう。

アカシックレコードが、放射的直線の線分の“またの名”であるならば、そういうことにならざるを得ない。

ゆえに、放射的直線の長さを決める“先端”は、やはり放射的直線に合一している主体の「関心の限界」と設定すべきだろう。

アルベド体験者の資質差

いや、もちろん各々のアルベド体験者は、自分の体験を絶対のものだと思っている。彼らはみな、それぞれで「これ以外のアルベド体験はない」と思っているのだ。

とはいえ、もし彼ら複数のアルベド体験者を並べて、その資質を測れるならばだ。やはりそこには「各人の相対性」が見つかることは必至だろう。

つまり、同じアルベド体験者であっても、まずその一方には、アルベドを至高のものとして絶対視してしまう“小器”がいる。

そしてもう一方には、アルベドをして、それを「自分にとって通過点に過ぎない」と割り切れるほどの“大器”がいるに違いないのである。

ユングも言っていたではないか。アルベドだけで「もう目的のすべてが達成されたとしても言わんばかりに、この状態を高く評価する錬金術師たちも多かった」と（＝小器）。

しかし「実際にはこれは銀ないし月の状態にすぎず、この後なお太陽の状態にまで高められなくてはならないのである」。そうもユングは言っている。

そして、それを実際に成し遂げられた者は、やはり大器の名に相応しいだろう。

ということは、同じアルベド体験者であっても、そこには資質の相対性というものが、厳然として存在するのである。私たちはどうしても、これを認めなければならない。

（2）汎神論的な神

二種類の神

放射的直線は「無限にして永遠なるもの」を即物的に表現した形姿である。

そして、こうした「無限にして永遠なるもの」は、古来より「神」と呼ばれてきた。よって、ここで放射的直線を「神」と呼んだとしても、何ら問題はないだろう。

しかし、この放射的直線という神には、その空間面と、時間面において、まことに不思議な「性質上のズレ」がある。

そして、このズレが、ある意味で“二種類の神”を、ひとつの放射的直線から生み出してしまうのである。

では、空間面と時間面のあいだに生じるズレとは何だろう。

まず時間面を先に見ておきたい。かかる時間面において、放射的直線は、「現在という虚無から、過去と未来という存在が放射されている」という形態をとっている。

ゆえに、そこには「虚無からの存在の創造」「無からの創造」という、キリスト教における“神の定義”が立ち現れている。

すなわちキリスト教の神は「創造神」であり、創造神とは如何なるものかといえば、それこそ「無からの創造」を行う者に他ならないのである。

*「神は世界を無から創造した」という考え方は、今ではキリスト教神学の常識になっており、「無からの創造」、ラテン語では *creatio ex nihilo*（クレアーティオ・エクス・ニヒロー）という専門用語がある。

筒井賢治『グノーシス』より*

よって、時間軸には、ユダヤ・キリスト教にとっての神となりうる「創造神」が現出していると言えるだろう。

存在そのものである神

それに対して、空間面では、かの「無限にして一なるもの」という“存在そのもの”が、唐突にいきなり現れてくる。なぜ現れてきたのかは、誰にも分からない。

ここに、非常に重大な問題がある。

たとえば旧約聖書の『出エジプト記』において、神はモーセに対して、自分のことを「在りて在るもの」と名乗っている。

この「在りて在るもの」は「在るべくして在る者」、すなわち「ちゃんとした存在の根拠があって、それによって在る者」と解釈することが出来るだろう。

そして、かかる存在の根拠こそは、他でもない「創造」なのである。

在るものは、創られたからこそ在る。創られたことが、在ることの根拠である。つまり「無からの創造」があればこそ“存在”は成立するということだ。

ところが、放射的直線の空間面には、「無限にして一なるもの」という“存在そのもの”が、そうやって存在できるための“根拠”を全く示さずに「在る」のである。

すなわち、その“存在そのもの”は「ただ現に存在しているだけ」なのである。

これを、少し踏み込んだ形で換言すれば、要するに、放射的直線の空間面では「無からの創造」が行われていないということだ。

そして、それは何故かといえば、何よりそこでは「虚無（無）」という要素が、全く関わってこないからなのである。

放射的直線の時間面では、たしかにそれが成立するために「現在」という名の虚無が介在していた。ところが、空間面にはそれに当たるものがない。

それはどうしてなのか。先んじて言えば、それが見つかるのは、座標10の「ルベド」においてだからである。

そこまで至らない、この座標9では、神的なる放射的直線は、その空間面において、どうしても「ユダヤ-キリスト教的ではない神」を生み出してしまう。「存在そのもの」である神を生み出してしまう。

そして、この神をして、神学者は「汎神論的神」と呼ぶ。

汎神論という異端

汎神論とは、まさに「存在そのもの」を神とする論説である。

言い方を変えれば、ネイチャー（＝被造物としての自然）を神とする論説と言えよう。この汎神論においては、私たち人間もまた“存在している”から、当然のこと神の一部である。

しかし、この「存在そのものである神」は、ユダヤ-キリスト教にとっては、明らかに異端の神である。ユダヤ-キリスト教の神は、あくまでも「創造神」であるからだ。

そもそもキリスト教では、ネイチャーの神化など、絶対に認めない。彼らは言う、「神は世界を創造した。だが、この私たちの世界は、今はもう“直接には”神との関りを持っていない」と。

なぜなら聖書を読むかぎり、次のように考えられるからだ。

「自然のなかには、神の創造の痕跡があるだろう。しかし、そこに神自身はいない。自然

のなかに、神は留守の状態である」とそのように。

たしかにクリスチャンであっても、創造の6日目までは、神は自然と共にあったと考
える。ところが、その6日目に人間を創造した神は、その人間に向かって、
「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をす
べて支配せよ」

と言ったのである。

ということは、神は「自然を支配し、管理すること」を人間に託したということになる。

少なくともクリスチャンは、このような考えを全面的に肯定する。なぜなら聖書によ
れば、天地創造の7日目に「神は、すべての創造の仕事を離れ、安息なさった」からで
ある。

神不在の自然、存在

そうだとすればだ。被造物である自然とは、とどのつまり“無神”の世界なのである。
そこを留守にしている神から、人間が管理を委託されている「神なき世界」なのである。
むしろ、これは普遍的真理ではなく、キリスト教としての見解に過ぎない。

そして、このような「神からの管理委託」のことを、英語で「スチュワードシップ」と
いう。

世俗的には、スチュワードとは、執事とか、財産管理人の意味であり、シップは行動
規範というところだろう。

だから、これが神学用語になると「自然を、神から管理委託されている者(=人間)に
とっての行動規範」といった意味になる。

あの西洋人に特有な自然支配の思想は、まさにそのスチュワードシップの具体的な表
れだろう。

日本人にとっては、どう見ても行き過ぎに感じられる「西洋人による自然の変造」――
それは彼らが自然そのものに対して「畏敬すべき神性」を認める必要がないからこそ、出
来ることなのである。

いずれにしても、神が留守にしているならば、その神不在の自然(存在そのもの)に
神性を認めることは深刻な誤りになるだろう。

それでなくとも、もし自然に神性を認めれば、キリスト教は、大きな困難に出くわさ
ない訳にはいかなくなる。

仮に「自然には、その全体に神性が宿っている」というテーゼを認めたとして。

するとその帰結は、間違いなく「木の神」とか「川の神」といった「八百万の神々」の
出現ということになる。

あるいは「木の精」とか「川の精」といった「異教の神々」の出現となってしまう。つ
まりキリスト教が敵対し憎悪した「ギリシア・ローマの神々」の出現である。

そして、そうなれば当然、人々の考え方は、様々な神々が共存する「多神教」に通じ
てしまう。これによって、ユダヤ・キリスト教の「一神教としての教理」は、大きく揺

らがざるを得なくなる。

かくして、自然のうちに神性を「留守にさせない」汎神論は、キリスト教にとって、かなり手ごわい大敵となる。

ゆえに、自然が神になり得る汎神論は、教会にとって“異端として”どうしても斥けざるを得ないものなのである。

（3）時間論者アウグスティヌス

神秘主義者アウグスティヌス

あらためて言うが、放射的直線はアルベド的な神の実像である。

この神は、そのうちに「創造神」と「汎神論的神」の両方を含んでいる。

そしてこれは「キリスト教の正統神」と「キリスト教にとって異端の神」の対にもなっている。さらに言えば、それは当然、放射的直線の「時間面」と「空間面」の対でもあろう。

この特徴的な二重性を、もっとも率直に体现している人物が、教父アウグスティヌス（354～430年）である。

彼はよく神秘主義者として名を挙げられるが、狭義の神秘体験は、まさにアルベド体験のことを指している。したがってアウグスティヌスは、アルベド（放射的直線）の影響下にあることになる。

そんなアウグスティヌスは、一般に「キリスト教最大の教父」として認知されている。

教父とは、古代から中世初期にかけて活躍した、キリスト教著述家のことをいう。とくに正統信仰の立場で著述をした“聖なる人たち”が、通例で「教父」と呼ばれている。

アウグスティヌスは、そうした定義にしっかりと合致する「時間論で名高い」キリスト教の正統的教父であった。

が、それと同時に、神秘主義哲学を通して、キリスト教会の内部に、異端の芽を残した、教会にとっての困り種でもあった。

ネオ・プラトニズム

アウグスティヌスに先立って、プロティノス（205? ～270年）による「ネオ・プラトニズム」が成立していた。

新プラトン主義とも呼ばれるそれは、哲学者プラトンの教えを進化させた教えであり、完全にアルベド的、神秘主義的な哲学だった。

プロティノスは、神を「一者」と呼んでいる。

これはまさに「全にして一なるもの」「無限にして一なるもの」のことである。そのため彼の神は、当然のごとく「存在そのものの神」すなわち「汎神論的神」となった。

そのことを、プロティノスの「流出論」が証明する。

というのも、流出論とはまさに、アルベドの座標から、アルベド以下の座標へと、その神性を下方流出させる理論であるからだ。

この流出した神性は、次第に希薄となりながらも、ついには物質的自然の隅々まで行き渡ることになる。

しかも話はそこで終わらない。自然の中へと下方流出した神性は、そこから一転、人間の向上心によって、再び上方へと還流することになるからだ。言うまでもないが、人間もまた、自然の一部である。

そして、かかる向上の流れが、最終的には「一者」に再合一する、というのが、プロティノスの「流出論」の骨格であった。

そうだとすれば、この設定の中で神性は、明らかに自然のなかに遍在していることになっている。つまり神性が、決して、自然のなかで留守になっていないのである。

時間論だけを取り上げる

上記のプロティノスの思想は、ネオ・プラトニズム（新プラトン主義）として、西洋における一つの思想的山脈となった。

そして、そうしたネオ・プラトニズムの本を読んで、アウグスティヌスは、彼自身のアルベド体験を得ることになったという。

すなわちアウグスティヌスは、32歳のとき、その読書中に「不変の光を見る」という神秘体験を持ったのである。私たちの用語で言えば、彼はアルベドの放射的直線と合一した訳である。

そうだとすれば、アウグスティヌスだって、プロティノスのように「汎神論的神」を語っても良さそうなものである。

しかしアウグスティヌスは、彼が合一した放射的直線の“空間面には”決して触れなかった。敢えて触れなかったのか、たまたまそうなったのかは分からない。

いずれにしても、アウグスティヌスと言えば時間論であり、空間論者としてどうとは、まず言われることがないのである。

この絶妙な処置によって、アウグスティヌスは、放射的直線に含まれるうちの、キリスト教にとっての正統神（創造神）だけに関わることが出来た。

すなわち彼は、れっきとしたアルベド体験者でありながら、同時に「キリスト教の正統教父」の座におさまることが出来たのである。

消えない汎神論的要素

しかし、そうは問屋がおろさない。そうアッサリとは。

なにしろ、アウグスティヌスが、ネオ・プラトニズムの影響を受けていることは、彼の自伝的著作である『告白』にも、ハッキリと明記されているのだ。

また、どんなに掻き消そうとしても、真正のアルベド体験者である人間の言行から、放射的直線の一方の帰結である「汎神論的要素」が消えるはずもない。

そのため、この「思想的異臭」が、後代の神秘体験者や、異端者によって嗅ぎつけられることになる。そして彼らによって、アウグスティヌスは「偉大なる先達」として担ぎ出されるようになるのである。

こうして教会側にとっても、アウグスティヌス主義者を、正統的キリスト者として見るか、異端者として見るかは、その見極めが実に難しい“やっかいな問題”となった。

また、彼のアルベド体験自体も、その扱いが極めて難しい。

すなわち、それが直接的には「恩寵の原理によってもたらされた」ということを強調すればである。それはもちろん、立派な「↓」となる。つまり「正統的キリスト教」のスタイルを表すものとなる。

しかし、アルベド体験までに至る、人生全体を貫くほど長い過程——これを、プロティノス的な「流出した神性の上方還流」として捉えるならば、それは当然「↑」として扱わざるを得ないだろう。

そして教会としては、これを異端的なものとして扱わない訳には、絶対にかかないのである。

まさにアウグスティヌスこそは、正統と異端の混交混成だと言えるだろう。

しかも彼は、キリスト教の屋台骨とも言うべき「偉大な教父」なのである。とてもではないが、教会が彼を無視することは出来なかった。

結果、彼という人物は、その存在自体が、キリスト教史における、最大級の矛盾となったのである。

（4）存在の原理

アルベド＝存在の原理

これまで見てきたように、放射的直線というアルベドの神には「創造神の要素」と「汎神論的神」の両方が含まれている。

すなわち時間面では創造神、空間面では汎神論的神が、立ち現れるわけだ。

他方、座標 10 のルベドでは、時間面のみならず、空間面でも、創造神の形態が成立する。よって、それはまさに「純粋な創造神」と言えるだろう。

この純粋な創造神と弁別するため、アルベドにおける神については、いちおう「それは汎神論的神である」と仮定義しておきたい。もちろん「純粋な汎神論的神ではない」と分かっているけれども、である。

ともあれ、このアルベドの汎神論的神は、哲学的には「存在の原理」と名付けることが出来る。無限に含まれない存在はないからである。

したがって、これを「存在を統括する原理」＝「存在の原理」と扱うことに問題はないだろう。

ところで——無論それ自体は偉大なことであるが——この存在の原理は、自分がそうやって存在している根拠（＝無からの創造）を示すことは出来ない。だから皮肉な表現をとるならば、

「汎神論的神は、仕方なしに『存在の原理』のレベルに甘んじている神である」とも言えるだろう。

しかし私たちとしては、これを、温かい目で見守ってあげるべきだ。

なにしろ存在の原理が、自らの出自（根拠）を見つけたならば、そのときには、自動的に次元上昇が起こるのである。そうして、そこに「創造の原理」が現れるのだから。

つまり、いまは単なる「在る神」であっても、かの時には、彼は創造という出自を持った「在りて在る神」に進化できるのである。

汎神とアルベディアン

ところで、文章表現の簡素化のために、ここで二つばかり、読者に許可を取っておきたいことがある。

一つは、これまで汎神論的神と呼んできたものを、単に「汎神」と呼ぶこと。もう一つは、アルベド体験者のことを「アルベディアン」と呼ぶことである。

汎神が単なる字句短縮であるのに対して、アルベディアンというのは、私の造語である。

読者としては、造語というものに抵抗があるかもしれない。だが、私は、それをおして、皆さんに「用語としての使用」を許可願いたいのである。

アルベディアン——どうだろう。いちいちアルベド体験者と言うよりは、ずっと聞こえが良いのではないだろうか。それに響きが堅苦しくないぶん、そこに、ある種の親しみが湧いてくるかもしれない。

しかも、この言葉が使用できるならばである。私は以後、ルベド経験者を「ルベディアン」に出来るし、ニグレド体験者を「ニグレディアン」と呼ぶことが出来るのである。

これは、文章の書き手としては、大変リーズナブルな話なのだ。

なお、私が「ニグレディアン」と呼びたいのは、座標 8, 9 に出てきたニグレド（根源苦）体験者ではない。

ここで言うニグレディアンとは、座標 0 が出てくる「更新されたニグレド」を体験した者のことである。

このことを付言して本章を終えることにしよう。

第5章 倫理的にみるアルベド（救済）

(1) 根源苦からの解放

孤独からの救済

アルベドの放射的直線は、これと合一した主体に「救われた」「救済された」という感覚を与える。

まことに主体は、アルベドによって救われなければならない。なにしろ彼は、座標 8, 9 にあって、剥き出しの根源苦に襲われていたのだから。彼はそこで、無防備な心の痛みを呻吟していたのである。

しかし、座標 9 にあって、主体は、いまや放射的直線と合一した。それによって彼は、苦しみから救われた。救われ尽くしたと言ってもよい。

まず、根源苦の空間面である「孤独 - 寂しさ」について振り返ってみよう。

この「孤独 - 寂しさ」は、「無限にして一なるもの」の自他一体、彼我一体の総合性によって解消された。

そこでは主体は、依然として自分のままでありながら、同時に他の誰かでもあった。まるで妊婦のように、一人でありながら複数、複数でありながら一人であった。

このような「私は彼である」「彼は私である」という文章が成立する世界に、寂しさは存在しえない。寂しさとは、自分が他人と異なり、自分だけしかそこにいない、と感じるときに生じる感情だからだ。

無常からの救済

次に、根源苦の時間面である「無常 - 虚しさ」について振り返ろう。

自我の確立段階において、主体は「無常である時の流れが、自分のすべてを取り上げてしまう」という現実直面していた。

「時が流れ、結局すべてが無に帰するのに、どうして人は何事かを成し遂げようとするのか。

結局は死んでしまうのに、どうして人は生きようとするのか。

冷厳無情なる時の流れを前にしたとき、そんなもの無意味ではないか。ただ虚しいだけではないか。実に何もかもが、ただただ虚しい」

このような灰色の苦しみが「永遠」によって解消される。すなわち、「時は流れない。現在とはどまり、その現在から、過去と未来が生まれる」

という認識が、時の流れとその無常的虚しさから、主体を抱えて掬い上げるのである。

つまり彼は、時の河流から“河岸”へと、その居場所を移し変えられたようなものなのだ。

岸には水流は及ばない。だからそこでは、当然もう、命も持ち物も、河流に奪い去られることはない。あてどなく川を泳ぎ、ついに泳ぎ疲れた主体にとって、それは何よりの慰めとなるのではないだろうか。

しかも、この「永遠」という時間形態は、彼の「命の不滅性」の根拠ともなるものである。

この不滅性によって、主体は、アルベドから離れた時であっても「転生輪廻という、悠久の時間を確保できる手段」を持った自分を想定できる。

つまり、そのとき私たちは、ただ死んで無くなるだけの存在ではなくなるのである。

さらには、その転生輪廻自体も、ただの「生まれては死に、死んで生まれ変わる」ということの、単調な繰り返しではなかった。

それは、生まれ変わるたびにアルベドを目指せることを意味していた。そしてまた、それは「あわよくば、アルベドの悟りに到達するための、その無尽蔵の機会を得られたこと」をも意味していたのである。

このように大規模な成長を可能にする「生まれ変わり」——これを獲得した今の主体に、虚しさなどがまとわりつけるはずがない。

無価値感からの救済

次に見るべきは、根源苦の倫理面である「罪 - 無価値感」からの救済についてだ。

無価値感とは、どこまでもちっぽけな自分、存在価値を持たない自分を痛感することである。

あるいは「このように罪深い自分など、世界にいない方がいいのではないか」という不安感である。それは、立つ瀬がないほど、心もとない感覚である。

それが、無限の存在そのものであり、普遍的な永遠者であるアルベドと合一したとき、一転して「自分ほど重要な存在はないのだ」という自信に取って代わられる。

そのとき自己存在の必然性が確知され、自己の実在感がどこまでも高潮する。

なぜ、そのような転換が起こるのだろうか。

一言で言って、それは主体が神になったからである。アルベドと合一している間、彼は確かに汎神そのものである。存在の神そのものである。

神秘主義者であるアンゲルス・シレジウスは、これを次のように形容する。

* 私は神と同じ大きさである。神は私と同じ小ささである。神は私を超えてあることはできない、私は神より以下ではありえない。

W・ジェイムズ『宗教的経験の諸相』梶田啓三郎訳より*

絶対無比の価値

シレジウスに限らず、その他にも多くの神秘主義者が「私は神だ」という言葉を残している。当然このような言葉は、読者諸君にとっては、身のほどを弁えない大言壮語に聞こえるだろう。

しかし、その「主体が神であるとき」が、アルベドに合一しているとき“のみ”を指しているならば、彼の言葉に偽りはない。たしかに主体は、神と合一している限りにおいて、真実に神である。

彼はそのとき、無限を掌握する一者である。すべての時間を支配するアイオン（時間の神格化）である。何の欠落もない「存在そのもの」である。

それが正真正銘の、主体にとっての自己認識である。

そうだとすれば、そこに自身の「ちっぽけさ」や「無価値感」など感じられるだろうか。「自分などいないほうが良いのではないか」などと考えられるだろうか。葦が風に揺れるような心許なさなど見出せるだろうか。

そんなことあり得るはずもない、というのが、その問いかけに対する答えだ。

今や彼は、ちっぽけどころか、果ても見えない巨人である。無価値どころか、絶対無比の価値を持った、全人類の至宝である。

彼はそこにいなくてはならない。なぜなら彼には、不動の価値があるから。彼はそこにいなくてはならない。誰もが彼を必要としているからである。

主体自身、今やそのことを当たり前とするだけの自信にあふれている。

かくして彼が神であるとき、無価値感などは、あっけなく消し飛んでいってしまう。つまり主体は、自己の絶対価値を知ること、かつての無価値感から完全に救済されたのである。

（2）絶対的な許し

罪の意識の消失

倫理的な救済については、前節の記述で、その全てを言い尽くしているように見えるかもしれない。

しかし、アルベドの救済には、もう一つの説明の仕方がある。それは罪の意識に対する「絶対的な許し」を考察することである。

思えば、この罪の意識こそが、主体に無価値感を与えたのだった。このあたりの事情について語っている箇所を、第二福音書から抜き書きしておこう。

* 実際、良識が極まれば、かえって「どうしても良識的に生きられない自分」「どうあっても正義の権化になれない自分」に情けなさを覚えずにはいられなくなる。これについてルターは言う。

「戒めは守られねばならず、もし守れないなら永遠の罰を受けることになる。

しかし、人間は結局それを守れないのだから、自然、戒めによって私たちが自分の無力さを知り、感じ、戒めを守るにはどうしたらよいかという不安をもつ以外には、迎える道もない。

私たちは、このことで謙遜にされ、自らは無だと感じ、義となるために必要なものが自らのうちにあることを見出す」

自らは無だと感じ——ルターが言うように、罪の意識が、主体の心に何を呼び起こすかと言えばである。それはおそらく「無価値感」と呼ぶべきものであろう。ルターの表現に則るならば「自らを無と感ずること」である。

すなわち「こんな自分など、いないほうがいいのではないか」という極度に気後れした思い。「こんな自分など、この世にいてはいけないのではないか」という、どこにも寄る辺なき思い。それが、私がここで「無価値感」と呼んでいるものである。（第2福音書より）*

母性原理の許容力

ところでアルベドは、その一面において、高次の女性原理を体現するものである。こ

の点でアルベドは、下なる女性原理である「混在的一者」の天上的対応物と呼ぶものである。

そして倫理的に見れば、混在的一者とは、母性（女性原理）の体現者である母親が、「その対象が自分の子供であれば、その子のどんな行為でも許容できる」

と偽りなく言えるような、まことに特殊な時期のことであった。

しかし乳幼児がすることは、たいていロクなことではない。彼らはどこまでも自分勝手だし、容易に泣きわめくし、何でも人のせいにするし……

仮に、乳幼児を社会人と仮定して眺めてみよう。そうすると、彼のすることが、みなデタラメで分別がなく、それゆえ罪深いものばかりなのが良くわかる。

そして、これは決して、私だけが感じていることではない。

*ユダヤ教において「幼な子」は律法（＝社会規範）に対する無知のゆえに負（マイナス）に評価されていたのである……

荒井献『イエス・キリスト』より*

ところが「母親」という母性原理の担い手は、そんな乳幼児を当たり前のように受け入れてしまう。ときには子供の「反社会的な行為」すらも愛しく思う。そうして常に、我が子に寄り添いながら生活を共にする。

無限的な対応性

こうした混在的一者に対して、総合的一者たるアルベドは、それと同質にして、かつ対照的な許容性を見せる。

まず、その「アルベド＝上なる母性（女性原理）」は、恩寵が働くさいに「精神的胎児」となった主体の罪を受容する。いな、罪というよりは、主体の“罪の意識”と言ったほうが正確だろう。

そうして主体の「罪の意識」を許容して包み込み、これを彼女の「精神的子宮」のなかで、完全に浄化してしまうのだ。

言うなればアルベドは、その「無限的な対応性」と「永遠的な包容力」によって、どんな主体の、どんな罪をも「改悛による浄化」へと導いてしまうのである。

それはまさしく「対象無限定に」である。すなわち、誰に対しても必ず、どんな罪に対しても必ず、である。

これについて、少しばかり詳しく説明していきたい。そこでまずは「誰に対しても」つまり「無限定的な対象受容」のほうから見ていこう。

混在的一者は、その許し（受容性）の対象として「我が子」という限定枠を作っていた。それは仕方ないことだろう。いかなる女性であっても、他人の子供相手では、「全受容

の対象」として、さすがに荷が重い。

かかる全受容とは「子供がすることの全てを——それがたとえ、社会人的に見れば明らかに罪深くとも——残らず受け入れること」である。

それは大変難しい対応と言える。それだけに、混在的一者には「血が繋がっている我が子だからこそ、それを何とか受け入れられる」というところが確かにある。

だが、一方のアルベドは全く違う。アルベドは、その無限のうちに、人類すべての個性を蔵しているからだ。そのため、その受容性の対応範囲は、まさに人類全体にも及ぶのである。

つまり、アルベドに目をかけてもらえない罪人は、人類のうちに、誰一人としていない訳だ。となれば、人類の誰も彼もが、アルベドの女性原理をして、これを「母」と呼んでよいことになる。

これがアルベドという“上なる母性”の「無限定的な対応性」の内実である。

母性の全受容

次に「どんな罪に対しても必ず」というところを見ていこう。

混在的一者は、我が子の反社会性を「まったく矯正されないまま、そのままの状態でもって」受け入れていた。

* この期間、母親は「子供の欲求をそのまま叶える」という全受容をしなければならない。全受容によって、主体の心と出来るかぎり密着しなければならない。

乳を欲しがれば与え、オムツが重ければ取り換え、眠ければ抱っこし、泣くならばあやさなければならない。

この期間だけは、母親は可能なかぎり、子供が欲しがっているものを、そのまま与えなければならない。子供の存在すべてを「それでよい」と言って受け入れなければならない。

『第二福音書』座標1「混在的一者」より*

しかし、このやり方だと、母親は彼女の赤ん坊を、当面のあいだ「ただ他人に迷惑をかけるだけの存在」のままにしてしまうことになる。

それこそ、我がままを言い、騒々しく、何でも人のせいにするような。

いや、もちろん生物学的には、これは是認せざるを得ないことだ。相手は、知力も体力もない赤ん坊。彼らに社会的分別など、無いのが当たり前なのだ。そんな乳幼児に対して、

「一定の社会性を身に着けるまでは、お前を世話してあげない」

などと言えば、それ自体が虐待になってしまうことだろう。

「肉身の限界」の有無

けれども、このような「矯正なき受容」は、天上的な母性であるアルベドの在り方としては相応しくない。

それは純白の布に、黒ずんだシミを付けるようなものだからである。それではアルベドの「白化」という訳語が泣くだろう。

では、アルベドに相応しい受容性とは、一体どのようなものだろうか。

それについて答える前に、もう一度だけ、混在的一者の受容性を振り返ってみよう。

もともと、混在的一者の「矯正なき受容性」は、赤ん坊という“生物的”弱者への対応であった。そして、そのことが、どうしても母親に「肉体的な限界」を押し付けずにはおかなかった。すなわち、

「弱者である子供を生かし守るためには、倫理的に矯正されていなくとも、その子供を受け入れなければならない」

という不徹底さを、母親に余儀なくさせていたのである。

それに対して、アルベドという“上なる母性”の受容性はどうか。

してみると、こちらの母性の場合は、まず彼女自身が、肉体的限界を持っていない。アルベドは飽くまでも精神的なグノーシスであり、霊的な悟りだからである。

そして、彼女の母性発現の対象となる「精神的胎児」のほうもまた、肉体的限界を持っていない。胎児となるのは、主体の心であり精神だからである。

そのためここでは、地上では見られない「矯正ありきの受容性」が成立することになる。つまりそれは、

「どんなに大きな罪であっても、永遠無窮の時間のうちにあっては、後悔と改悛の回心によって、主体は完全に浄化（矯正）されるだろう」

という前提に依って立つ母性であり、受容性なのである。

永遠的な包容性

アルベドという“上なる母性”が受容するのは、まさに無窮の時間のなかで「後悔と改悛と回心」を経た“かつては罪人だった者”である。

それは“かつて”であって“いま”ではない。すなわち彼は、いま（＝受容時）においては、ちっとも汚れがない者なのである。

もちろん、それは恩寵の原理が働いている只中の出来事である。よって主観的には、主体はそのとき、自分自身の根源苦（罪の意識）に呻吟せずにはいられないだろう。

しかし、そんな彼を客観的に見ればである。そのとき彼は、確かに「無垢な魂」と呼ぶに値する者となっているのである。きっと「己の罪の意識に泣いている無垢なる魂」という言葉は、誰の耳にも自然に聞こえるだろう。

ひとつ例を挙げることにしよう。ゲーテの『ファウスト』の結尾部は、まさしく今述

べた「アルベドによる、精神的胎児の受容場面」にあたる。

このシーンでグレートヒェンは、アルベドと一体化している霊人として、次のように語る。

むかしお慕いしました方（＝ファウスト）今はもう濁りのない方、あの方が帰ってまいります。（山下肇訳）

汚れも濁りもない者を迎え入れるのだから、受容者たるアルベドもまた、それによって汚されることは微塵もないだろう。

事実、神秘主義者のプロティノスは、一者（＝アルベド）をして「全き善なるもの」と定義した。その混じり気のない善性は、まさに上述のようにして保たれているのである。

しかも、アルベドにおいては、罪人が「汚れなき者」になるまでの期間を待つ必要もない。

それは、罪人の浄化にどれほど長い時間を要するとしても、アルベドの「永遠」は、その時間のすべてを、自身の“現在”のうちに含んでいるからである。

よって、精神的胎児の浄化もまた、アルベドの母性が発現される「今」ならば、そのとき完全無欠に成就してしまう。それは、究極の包容性をもった「今」が現出したからである。

そして、この「今」の在り方こそが、アルベドという上なる母性の「永遠的な包容性」なのである。

第6章 マリア、イエス、パウロ

(1) 童貞聖母

母にして処女

本章は、基本的には前章「倫理的にみるアルベド」の続きである。ここでは、アルベドの倫理面である「救済」の内容を引き継ぎながら、そこにキリスト教のドグマ（教義）を絡ませた話をしてみたいと思う。

まず手始めに、前章で見たような、アルベドの救済性、限界を持たない母性を、ごく短い言葉で、シンボリックに表現してみたい。

そうすると私の中では、自然に「精神的な子宮」「天上的な女性性」「靈的な母性」といった言葉が浮かんでくる。

さらに、これらの象徴語に人格性を付与してみよう。

すると「肉体的性を克服した母親」「処女にして母」そして「童貞聖母」といった尊称が、それに相応しいものとして挙げられそうだ。

これらのワードには、いずれも処女性と母性とのせめぎあい、あるいは両立性が見られる。

ところで「母になる」ということは、まず第一義的に「妊娠出産」という、きわめて肉体的な経験を必要とする事柄である。それは当たり前のことと言ってよいだろう。

しかし、それをそのまま「当たり前」と言っているだけでは、その母性は、どうしたって、肉体的限界から離れられっこない。

そこでアルベドの象徴としては殊更、その母性の保持者が「肉体的には、妊娠も出産もしていない」ということが強調される。

もちろんそれは、現実的には矛盾であろう。しかし、矛盾の狭間に真理が宿っているときにこそ、人類は“象徴”というものの、優れた表現力に頼ってきたのである。

かくして「アルベドの救済力」の写し絵である彼女は“象徴的には”母でありながら処女となり、母でありながら童貞となるのである。

童貞聖母の実例

少しばかり、童貞聖母の実例を挙げてみよう。

してみると、古代ギリシアでは、月の女神アルテミスが、「かつては豊穰多産の大地母神であったが、のちに処女性を与えられて、太陽神アポロンの“双子の兄妹”の地位にまで高められる」

という歴史を持っている。そのため後期の(=一般の)ギリシア神話で見られるアルテミスは、人間の男に肌を見られただけで激怒する、処女にして純潔の乙女となっている。

ところが、そんな処女アルテミスが、「エフェソスのアルテミス」としては、なんと「18もの乳房を付けた女神像」として遺されているのだ。

となれば、こちらは初期にして元来の「大地母神アルテミス像」を継承していると言えるだろう。それはまさに「母であること」が、体の表面に溢れかえっている状態だからである。

純潔の処女と18の乳房——理性的に見れば、それは「異様すぎる両極性」と言わざるを得ない。もちろん矛盾そのものでもあろう。

しかし今の私たちならば、そこに「我が子に限らない(=乳房二つを超える)対象無限定な母性的許し」という「霊的な救済シンボル」を見ることができるだろう。

また古代ギリシアには、農耕の女神デメテル(=大地母神)と、その娘である、乙女ペルセフォネー(処女神)の“二神一体の祭儀”なども存在していた。

これは「エレウシスの秘儀」と呼ばれている祭である。むろん、その象徴しているものは、母性と処女性の合体。すなわち「母にして処女」という霊的存在だ。

となれば結局、アルテミスも、エレウシスの秘儀も「童貞聖母を表現した象徴」の事例に他ならないのである。

聖母マリア

もちろんキリスト教圏では、聖母マリアが、童貞聖母の象徴を担っている。

マリアは処女のまま、霊(聖霊)によって妊娠した。それはまさに霊的な母性の表れと言っていいだろう。そうして彼女は、のちに救世主となるイエスを、出産したことになる。

これは旧約の『イザヤ書』の予言成就でもあった。そこにはこう書かれている。

見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。(第7章から)

マタイにとっての「おとめ」は若い女性に過ぎなかったが、ルカにとっての「おとめ」は、まさしく処女(童貞)のことである。

かくてマリアは、童貞聖母として、インマヌエル・イエスを産んだのだった。

しかも、マリアという存在は、アルテミスやエレウシスの秘儀と異なり、現代においても、その象徴的生命を涸らしていない。

その証拠に、カトリックの教会では、今もマリアに、信徒たちの衷心からの祈りが捧げられている。すなわち、多くの信徒が、告解のために教会を訪れ、そこに立つ聖母子像の前で、

「マリアさま、どうか私の罪をお許してください」

と真剣に祈っているのである。今この時間にも、きっとどこかのクリスチャンが、聖母マリアに罪の許しを願っていることだろう。

事実ではない真実

このマリアを、改めてアルベドの象徴として扱ってみよう。

事実そうであるとすれば、彼女はその存在のうちに「無限と永遠」を秘蔵していることになる。

そして、この無限によって、マリアは万人の母となり、永遠によって、すべての罪を浄化する救済者となる。だからこそ、あらゆるカトリック教徒が、彼女の「救いの力」を期待せずにはいられなくなるのである。

正直なところ、私は「処女であるマリアが、肉体的にイエスを産んだ」という事実が、歴史的に実在したとは思っていない。

無責任な傍観者としてではなく、再臨のキリストとして言うが、おそらく、そういう事実はなかっただろう。

しかし私は、童貞聖母マリアに対する崇敬は、宗教的には、不可欠なドグマだと思っている。それが「アルベドの救済」を明確に象徴するものだからである。

そう、宗教は「象徴によって真理を語る」ものなのだ。それは決して「事実によって歴史を語る」ものではないのである。

そういえば、その象徴的同一性によって、聖母マリアは、かつて「エフェソスのアルテミス」との習合（合体）が行われた。

そもそもエフェソスは、イエスの死後、マリアが余生を過ごしたと言われる町である。そこには、マリアが住んだという家すら、遺跡として残されている。

そのため自然と、古代のアルテミスへの信仰が、マリアに対する崇敬に、オーバーラップしたのだろう。それにより、ここに強力な「霊的母性の巡礼地」が現出することになった。

それはプロテスタント的視点（象徴否定）から見れば、不純な「異教との混交」だったかもしれない。しかし、私たちからしてみれば、その習合も混交も、決して理由のないことではない。

それはもちろん、聖母マリアもアルテミスも、その「表現しようとしている内容」が同じだからである。すなわち「空間的にも時間的にも限定をもたない、霊的な母性による救済」という。

(2) 救世主イエス

イエス・キリスト

キリスト教には、聖母マリア以外にも「無限と永遠を背景にもった絶対の許し」のシンボルがある。他ならぬ「イエス・キリスト」である。

言うまでもなく、イエスはキリスト（救世主）である。そして、救世主という言葉を読み解きほぐせば、要するに「世界を救済する神」ということになるだろう。

主（神）という呼び名について、少しだけ説明しておこう。

神を主と呼ぶのは、旧約時代のユダヤ人が、神の名「ヤハウエ」を、直接口にするのを畏れたからである。そのため彼らは、神をして、アドナイ（わが主）と読み替えた。

そして、その呼び習わしが、新約時代にも受け継がれることになる。そうして「神であるイエス」が、弟子や信徒たちから「主」と呼ばれるようになったのである。

かくして、救世主イエスは「世界を救済する神」と同義である。

もちろんこのイエスは男性である。だが彼による十字架上の許し（＝救済）は、どう見ても、母性的な受容性に満ちている。

史実性は低いとされるが、分かりやすいので、例として『ルカによる福音書』を挙げてみよう。

十字架上で死に際にあつたイエスは、息をするのも辛いなかで、次のように言っている。

「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」

イエスがこう言った時、彼はまさしく、聖なる母性（＝アルベド的救済）の体現者だった。

というのも、イエスのこの一言ほど、愚かな人類すべてを受容し切った言葉もないからだ。

なにしろ父が許す以前に、すでにイエスが「人類の愚かさの全て」を許し切っているのだから。「自分が何をしているかも分からない未熟な者を責めても仕方ない」とそう。

それこそ、まるで母親が、愚かで未熟なわが子に対して、そうするようにである。

いや、彼はもちろん女性ではない。けれども、このときのイエスは、女性以上に母性的だったのである。私はそのように言い表さざるを得ない。

条件付きの愛

そもそも男性原理とは「分けること」である。

そして、その「分けること」の教育的機能は、まずある条件を出すこと。対象を、その条件に適合する者と、適合しない者にと「分ける」こと。

そのうえで「条件に適合する者」だけを受容することにある。

簡単な例で言えば、たとえば「勉強すべし」という条件を出す。そして、実際に勉強した子供は褒め（受容）、勉強しなかった子供は叱る（排斥）。そうやって子供たちに「自分はどういう方向に進めばいいのか」という方向性を示す。

この場合は、必賞必罰によって、子供たちは「自分たちは勉強すればいいのだ」ということが分かる。

逆に、勉強してもしなくても結果が同じならば、子供たちは、自分がどこへ向かっていいのか、いけないのかが、まるで分からなくなるだろう。そうなれば、子供たちと成長とのつながりは途切れてしまう。

よって飽くまでも、条件をつけて“分け”、子供たちに「迷いなき成長」を促すのが、男性原理の仕事なのである。そのように男性原理は「条件付きの愛」を生業とするものだと言えるだろう。

そしてイエスは、生物学的に見れば男性である。

したがってイエスが、その素性のおりに男性原理を体現していたとすれば、である。彼は決して「救うべき価値を持っている」という条件を満たせずにいる者たちを、その「神の国」のうちに受容したりはしなかつただろう。

つまりイエスは、本来ならば、誰も救わなくても良かったのである。

なにしろイエスの眼前に並んでいたのは、神の代理として地上に降りた者を、信じることなく、侮り続け、傷つけて恥じず、そして最後には殺そうとまでしている者たちなのだ。

これではどう考えても、彼らは「救うべきでない」者たちではないか。

とすれば、彼ら救うべきでない者たちは、男性原理的な救い（受容）からは、間違いなく斥けられるはずである。

人間の限界を超える許し

十字架上のイエス、救世主イエスが受容しようとしてるのは、そうした、どう考えても救うべきでない者たちだった。

それを敢えて受容すると決めたならば、そこには間違いなく、桁外れに強大な女性原理が必要となる。つまりかの「霊的な母性原理」が必要になる。

となればイエスは、たとえ自分の心を女性性に明け渡してでも、それを獲得しなければならぬだろう。

事実、アルベディアンになるということは、そういうことである。

主体はアルベドを体験することによって、女性原理に自分の心を明け渡す。明け渡すというのが言い過ぎなら、女性原理を「大量に取り入れる」のである。

そうすることによって彼は、ヘルマプロディトス（雌雄同体）となる。

イエスもまた、ヘルマプロディトスだった。

だからこそ彼は、そのとき確実に持っていたと言えるのである。かの強大な女性原理を。これまで論じてきた「限定性を持たない母性」を。このことを、私たちは忘れずにおこう。

してみるとイエスは、その日、本当にひどい目に遭っていた。前夜には弟子に裏切られ、不当な裁判にかけられた。

夜が明ければ、殴られ、鞭打たれ、唾を吐きつけられた。そうして重い十字架を担がされ、手足に杭を打たれ、ついに十字架にかけられたのだった。

そして、そうやって十字架にかけられたイエスの眼に映っていたのは、まさに、その加虐の実行犯たちだった。

救世主を殺害しようとする者たち。それはまさに「救うべきでない者たち」を代表するような存在だった。

そして、イエスの肉体的生命は、極限的な加虐によって、今まさに絶命しようとしていた。しかし、このような状況のなかで、先の言葉は語られたのである。

「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」

神のごとき絶対の許し

それは、とうに人間の限界を超えている“許し”だった。イエスは一般的な人間の次元で考えれば「絶対に許せるはずがない者たち」を許しているからである。それは真実、「こんな者たちでも許せるイエスならば、彼が許すことの出来ない罪人など、きっと誰一人いないだろう」

という事を、人々に納得させずにはおかないほど強烈な許しだった。それほどにも揺るぎない「絶対の許し」だった。

ということは、ここでは、人間であるはずのイエスが、本来神だけが実現できる「絶対」を現象化させていることになる。

つまり彼の許しの能力は、すでに神の領域へと、深く踏み込んでいるのだ。

イエスによる「十字架上の許し」は、だからこそ神的なのである。それは、彼が神の子であることを証するものであり、彼の許しを、神の許しと同一にするものでもある。

それだから現代にあっても、心に罪の意識を抱く者は、衷心からイエスに許容の祈りを捧げるのだ。

他の誰もが許してくれなくとも、きっとイエス・キリストだけは、自分の罪を許してくれるだろう、とそう確信するがゆえに。

十字架の意味

とはいえ、多くの人々にとって、あの磔刑は、イエスの真なる意図が見えない“何としても不可解なもの”だっただろう。

実際、パウロの教義（＝贖罪説）を聞いても、納得が得られない者も多かったのである。そんな人々の多くが、

「本当のところ、あの十字架上の死は、一体どういう意味を持っていたのだろう」

と疑問を抱いてきたのである。かかる疑問に対し、いま、アルベドの座標にあって究明を試みるならば、その答えは次のようなものになるだろう。

まず前提であるが、純粋な「無限」や「永遠」や「救済」は、アルベドのテリトリー（座標9）でのみ実現するものである。

だから、これを、そのまま地上に降ろしてくることは出来ない。やろうとすれば、アルベド侵入と同様の「純粋性の低減」という問題が発生してしまう。

だから「それでも敢えて」これを地上で表現しようとするならばである。その場合には、よほど神がかった異常な出来事や、よほど神的な説得力を持つ、特別な出来事が必要となる。

そしてイエスによる「十字架上の許し」は、まさにそれだった。

福音書を読むかぎり、イエスはあらかじめ、天なる父から「十字架にかかって“絶対的な許し”の象徴となれ」と命じられていたようだ。

だからイエスは、それが自分にとっての「最も大切な使命」であることを認識していた。それがイエスの言う「私のとき」だった。

狂人に見えるほどの純粋性

しかし、その一方でイエスは、かかる大切な使命を「出来ることなら、やりたくない」とも思っていた。

それは当然のことだろう。十字架刑のさいに受ける肉体的苦痛は、なまじの拷問よりも、ずっと激烈であろうことが予想できたからである。

その気持ちが、ゲッセマネの園での独白に表れている。このときイエスは言った。

「父よ、できることなら、この杯（十字架）をわたしから過ぎ去らせてください」

この言葉ほど、イエスの人間味を感じさせるものはないだろう。血が滴るような大粒の汗を流しながら、そう言って彼は、自分の弱さを露わにした。

しかし結局のところ、イエスの勇気は、苦痛と恐怖から逃げ出すことよりも、自分に与えられた義務を、粛々と遂行することを選んだのだった。

つまりイエスはゲッセマネの園で、最終的には、天なる父に向かって、「しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに行ってください」

と言い切ったのである。

そして、そう言った直後に捕縛されたイエスは、ユダヤ教の聖職者たちの怒りを煽り、ついには我が身に磔刑を呼び込んだのだった。

そして、あの十字架上で、彼は確かに人知を超えた“許し”を口にした。

「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」

そう言ってイエスは「救うべきでない者たち」を許しきった。

きっと人々には、イエスが狂人に見えたことだろう。少なくとも、まともな人間には見えなかったに違いない。

しかし「狂う」とは、ある意味で「人間の限界を超える」ということでもある。

すなわち、かように「狂って見えるほどのこと」をしたからこそ、イエスは、アルペド侵入の限界を超出することが出来たのである。限界を超えて、この世に「神的な救済」「絶対の許し」を現成せしめることが出来たのである。

それこそ、低減性の問題を蹴散らし、アルペド自体の純粋性を完全に保ったままで。

霊的な感受性を持っている人ならば、このときのイエスに「無限にして永遠なる神」を二重映しに見たかもしれない。

(3) アルベディアン・パウロ

パウロが曲げたもの

イエスが十字架上で表現したのは、前節で見たように、アルベドの「救済」だった。すなわち、無限と永遠のうちに成就する、全人類の完全なる許しである。

ところが、イエスの生涯が“キリスト教”へと変貌していく過程で、パウロの神学が、かの「絶対の許し」から“無窮の時間”という重大要素を取り払ってしまった。無窮の時間（永遠）があってこそ、すべての罪人の改悛と回心とは成立するというのに、である。

パウロによれば、絶対の許しは、イエスを神の子と信じた時点（＝洗礼を受けた時点）で与えられるものである。これをキリスト教では信仰義認という。

かかる信仰義認は、人がその「絶対の許し」に至るまでの“過程”を持たない。言い換えれば「ヘルメスの杖を、座標1から座標9まで登っていく」というような“前段”を持ってない。

むしろパウロは、そうした過程や前段を持たなくとも、イエスを神の子であると信じれば、その時点で「完全で絶対の許し」が与えられると言うのである。

つまりパウロの言に従えば「教育の段階から、アルベドの段階へと、いきなりスキップが出来てしまう」ようなものだ。

これは、私たちにとっては、かなり「インスタントな印象」を与える教えと言えるだろう。もっとはっきりと言えば、実に「虫のいい教え」である。

失われた実感

しかし、現実の救済はそんなものではない。ヘルメスの杖を登り、座標9で本物のアルベド体験を持たないかぎり、誰も「本当に救済された実感」などは、決して味わえないのである。

それはそうだろう。最大の問題は救済の「器」のほうにあるのだからである。

つまり事前に「救済を受け取れるだけの自分」を作らないかぎり、どんなに有難い救済も、私たちの眼前を、ただスッと通り過ぎていってしまうからだ。

まずは良識を確立して、根源苦（罪の意識）を認識できるようになること。それが救済の最低条件である。その器を作らないかぎり、救済のエリクシルは、どこにも注がれることなく、あてどなく無駄に流れていってしまう。

だから、救済宗教であるキリスト教に帰属していながら、その信徒の多くは、次のような思いに捉われずにはいられないのである。

「パウロの言う通りならば、自分はすでに救われているはずである。それにも関わらず、私には、その救われている実感が少しもない」

このような“本音”を打ち消すために、キリスト教の神学では様々なことが言われている。それこそ、ありがたい教説がいくらでもある。

しかし結局のところ、それによってでは、誰も「救いの実感」に辿り着かない。

それは根本的なところで「イエスが本当に表していたもの（＝アルベドの救済）を、パウロが、無理やり捻じ曲げてしまった」からである。

アルベドを体験しているパウロ

もっとも、パウロ自身は、アルベド体験によって、真実の救済に与っていたようである。

彼は、次のように告白する。

* その人（＝パウロ自身）は十四年前、第三の天にまで引き上げられたのです。

体のままか、体を離れてかは知りません。神がご存じです。わたしはそのような人を知っています。（中略）彼は樂園にまで引き上げられ、人が口にするのを許されない、言い表しえない言葉を耳にしたのです。

このような人のことをわたしは誇りましょう。しかし、自分自身については、弱さ以外には誇るつもりはありません。*

これは新約聖書の『コリント信徒への手紙』からの引用である。

そして、ここには「真のアルベディアンしか語れない」キーワードがいくつか並んでいる。その一つが「人が口にするのを許されない、言い表しえない言葉」というところだ。

アルベドの無限では「自他一体」という状態が成立する。そこでは自分と他人が、一つのものとして総合されている。

そして、自分と他人が一つになっているならば、そのときコミュニケーションというものは不要になるだろう。

しかして、言葉とはコミュニケーションの手段に他ならない。それが不要になるのだ。ならば、そのとき主体は沈黙するしかあるまい。そういう訳だ。

こうした事情があるため、アルベディアンは、よく、「言葉にできない、言葉にならない」という定型句を用いることになる。パウロが言っているのは、まさにその定型句の一例なのである。

実際には『コリント信徒への手紙』には、他にもアルベド体験のキーワードがある。だが、それが本題ではないので、これ以上は論じないでおこう。

何よりも重要なのは「パウロ自身は、アルベド体験者だった」という点である。

アルベディアン(アルベド体験者)の限界

しかし、そのアルベドに至るまでの過程、すなわち「ヘルメスの杖」のような“段階論”は、真実の意味では、アルベディアン（アルベド体験者）しか説くことが出来ない。

それがどうしてかについては、のちに座標 10 で語ることになる。

ここで言いたいのは「アルベディアンには、段階論が説けない」ということだ。

そのように段階論が説けないものだから、アルベディアンは、単純に、我が身に起こった出来事に、直接万人を引き寄せて、自身の思想を組み立てる。

つまり彼は「自分の身に起こったことは、誰の身にも起こるはずだ」というふうを考える訳だ。

結果として彼は「恩寵の原理」を無理やり一般普遍化してしまう。誰の身にも「恩寵の原理」が引き起こされると考えてしまう。すなわち、「誰であっても、胎児のように自分の弱さを認めれば、そこに母性的救済が補償的に現れることになる」

ということ、自分にとってのドグマ（教義）にしてしまう。

そしてこれは「イエスの救いを信じて、罪人である自分を認めれば、その時すでに救済は与えられている」という、パウロの“インスタント・モデル”と軌を一にするものである。

第一福音書を振り返るようであるが、こうした「努力を要さない救い」が唯一の教義となったとき、キリスト教圏は「↓」に埋め尽くされた。

そして「↑」とのバランスを欠いたその精神的世界は、宗教的に大きく歪んでしまったのである。

ここにアルベディアンによる宗教の妥当性の“限界”があると言えるだろう。

教えより人生を

ただし、パウロ自身は、しっかりとヘルメスの杖を登ることで、アルベドまで到達した人物だった。

彼はもともとユダヤ教徒である。すなわち彼は「ユダヤ教の律法遵守」という二元的マインドを用いて、自身の「分化」を経験していたのである（座標 4～5）。

さらにパウロは、パリサイ派としてキリスト教徒を尋問（拷問？）していた。そして、そうしているうちに、知らず知らず彼は、おそらくはアルベド体験の準備をしていたのだ。

そのとき彼は、無意識のうちに、イエスの教えの“許し”に惹かれつつあったに違いない。この許しは、アルベド侵入の倫理面を表すものである（座標 6～8）。

しかしパウロは、その「惹かれていること」を意識的には認められなかった。意識的

には、彼は飽くまでもユダヤ教の忠実な僕だった。

そのため、パウロの心は千々に乱れ、煩悶し、ことさら残酷に、キリスト教徒を迫害することになったのである。

そして、その精神的緊張（分裂状態）が、爆発的な奇跡体験である「ダマスコの回心」につながっていく。これがパウロにとってのアルベド体験の端緒であっただろう。

そして彼は、やがて恩寵の原理によって、アルベドの救済の全体を実体験するようになる（座標9）。

したがって、パウロ自身は、インスタントな救済に与った訳では、全然ないのである。彼は確かに、救済の事前準備として「ヘルメスの杖」を梯子登りしていた。そういうことなのである。

だから私たちは、もし真実を掴もうとするならば、アルベディアンのお教えに、従順になりすぎない方がよいのだ。

それよりは私たちは、アルベディアン「人生」のほうに、強い注視を払うべきなのである。そこにこそ、本当のことは隠されているのだから。

再臨のキリストによる福音書 3-II

著 正道

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
